

プロフィール——「誰？」のための手がかり(keys)を君に

小林康夫（こばやし・やすお、現代哲学・表象文化論）

1950年生まれ。東京大学・名誉教授。1986年から2015年まで東京大学・駒場キャンパスで仏語、表象文化論、現代哲学などを教える傍ら、分野にとらわれることなく、文学・アート・建築・音楽など多様な領域で哲学的な批評を实践してきた吟遊詩人的フィロゾファー。とりわけ21世紀に入って UTCP(東京大学・共生のための国際哲学センター)の拠点リーダーとして世界各地の哲学者たちとの交流を实践してきた。

著書に、『不可能なものへの権利』、『無の透視法』、『起源と根源』、『身体と空間』、『光のオペラ』、『出来事としての文学』、『表象の光学』、『絵画の冒険』、『こころのアポリア』、『青の美術史』、『オペラ戦後文化論 I II』、『君自身のアートへ』、『存在とは何か』、『無明のフィロソフィア』・・・など多数。また『知の技法』、『現代アート入門』、『文学の方法』などの編著やデリダ、リオタール、デュラスなどの翻訳も多数ある。

——今年76歳になった現在から振り返るなら、大学という場で、自己拘束的な専門性に縛られない、絶えずクリティカル(批評的)に漂流を続ける「知の吟遊詩人」だったと思う。だが、あえてその漂流を導いていた問いがあるとしたら、それは「存在」であった。自分自身の生を通して、他者の生を通して、「存在とは何か」という問いへの答えを探し続けている。「存在」という「響き」に耳を傾けること。

【年譜】

- | | |
|--------|--|
| 1950 年 | 東京豊島区に生まれる。(区立千早小学校、千早中学校、都立小石川高校を経て) |
| 1968 年 | 東京大学理科 I 類に入学。時代は大学紛争(全共闘運動)の時代、物理学志望を諦め「文転」する。フランス語に賭けることにする。69 年東大入試がなかったこともあって2年間留年(この間に雑誌の編集をしたり、同人誌を作ったり、フランス哲学の研究会などを組織。自由な「学び」の時代ではあった。)本郷ではなく、駒場の教養学部教養学科(フランス科)に進学。 |
| 1974 年 | 仏語の卒論(マネ論)を書いて卒業。駒場の比較文学比較文化の修士課程に進む。 |
| 1976 年 | ボードレールを論じた修士論文『存在の冒険』を書いて博士課程に進学。 |
| 1977 年 | この頃、マルセル・デュシャンの「大ガラス」レプリカを作る作業チームに入って活動(翻訳や論考執筆など)。この年、はじめてフランスへ渡航。 |
| 1978 年 | フランス政府留学生試験にギリギリで通って3年間パリ第10大学テキスト記号論学科博士課程に留学。(この間、ギリシア、イタリアなども旅行)。 |
| 1980 年 | スリジー・ラ・サルでの10日間のデリダ・コロクに参加(衝撃！) |
| 1981 年 | 第3課程博士論文(テキスト論)を提出、博士号を取得し帰国。 |
| 1982 年 | 電気通信大学講師(フランス語)となる。フランス人女性と結婚。 |
| 1986 年 | 東京大学教養学部助教授となる。 |
| 1989 年 | 最初の単著を2冊同時刊行(『無の透視法』、『不可能なものへの権利』)この頃より新設された「表象文化論」の教員メンバーとして雑誌『ルプレザンタシオン』(筑摩書房、93 年まで5号刊行)の編集などを行う。 |

1991 年	ハイデガー／ベンヤミンなどドイツ系作家を論じた『起源と根源』(未来社)
1993 年	東京大学総合文化研究科教授となる。
1994 年	船曳健夫との共編『知の技法』(東京大学出版会)がベストセラーとなる。
1995 年	文科省海外研修制度で1年間パリ滞在(建築関係の評論集も書く)。
2001 年	東京大学評議員に選出され、1年あまり駒馬寮廃寮問題に取り組む。
2002 年	文科省の 21 世紀 COE プログラムとして UTCP(University of Tokyo Center for Philosophy)が採択され、その拠点リーダーとして以後、定年まで、世界各国の哲学研究者との交流を行う(海外数十箇所英語ないし仏語で講演。また200人以上の研究者を招いてシンポジウムや研究会を主催)。
2003 年	セゾン現代美術館で展覧会「ニューヨーク 光と影」を組織する。
2007 年	英仏語論文集「Le Coeur /La Mort」(UTCP)を刊行。
2011 年	日本証券奨学財団の修了式で東日本大震災を経験(翌日パリ・ローマへ)。
2015 年	東京大学を定年退職。青山学院大学院総合文化政策学特任教授となる。
2020 年	青山学院大学を退職。
2024 年	「週刊 読書人」で「百人一瞬」の連載を開始。

【著書よりいくつか】

『存在とは何か』(2023)、『君自身の哲学へ』(2015)、『若い人のための10冊の本』、『存在のカタストロフィー』、『こころのアポリア』、『オペラ戦後文化論』(Ⅰ、Ⅱ)、『歴史のディコンストラクション』、『光のオペラ』、『出来事としての文学』、『身体と空間』、『建築のポエティクス』、『思考の天球』、『絵画の冒険』、『表象の光学』、『青の美術史』、『人間への過激な問いかけ』、『死の秘密、希望の火』、『ミケル・バルセロの世界』…ほか、『日本を解き放つ』など共著、編集本、翻訳、辞典(哲学の木)、『フランス哲学事典』執筆など多数。仏語の詩画集もある。(韓国語・中国語への翻訳もある)。